

# リベルテール



3月号

Le Libertaire VoL, III, No 4

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可  
昭和四十七年三月十一日発行第二十七号

定価一〇〇円（送料共）

目次

| 状 況                      | 黒川 和行 | 1  |
|--------------------------|-------|----|
| 二つの叛乱―クロンシュタットと<br>ウクライナ | 三浦 精一 | 3  |
| 「アナキズムと二つの雲」への反論         | 西塔 昌弘 | 9  |
| たそがれ日記                   | 山鹿 泰治 | 11 |
| 書き洩らされたアナキズム運動史          | 横倉 辰次 | 13 |
| 文献 案 内                   |       |    |
| クロンシュタット叛乱集会             | 三浦 精一 | 16 |
| クロンシュタット叛乱集会雑感           | 流 人   | 17 |
| 野 火                      |       | 19 |

状 況

黒川 和行

吹キ付ケル大気ノ軌カ  
 辺リヲ一瞬冬ニシタ  
 凍ツイタ河ベリデハ  
 引キ裂レタ灌木ガ  
 酷シイ風ニムシラレテ  
 ガアガアト響キ  
 雲ガ鋭ク  
 吠エテイルオレノ咽喉ヲ突刺シ  
 ドス黒イ飛沫ガ冬ノ面ヲ濡ス  
 オオ 業火ハ無イカ  
 狼ハイナイカ  
 ウロツキ疲レタオレノ頭骸ガ  
 鉄橋ノ上デグラグラ揺ギ  
 ボロボロト手揺ガ砕ケテ  
 機械ノ爆音ガブチアタルノダ  
 オレノ眼ハ  
 青褪メタ河底ヲ見詰メテイル  
 オレノ眼ハ  
 虚無ヲツキサシテイル

非情デアッタ過去  
 苛酷ナ未来ニムカッテシカシ  
 踏ミ越エネバナラヌノカ  
 絶エザル虚空ノ充填ノミガ  
 オレノ一切ヲ構造スルノカ  
 寒風ニ晒サレタ薄キノ原  
 果シナイ枯葦ノウネリヨ  
 アラユル隔絶ノ中ニ  
 蒼灰ノヒキツタ荒野ノ中ニ  
 コロゲ墜チ  
 今コソ思ウノダ  
 今コソオレハワメクノダ  
 凍ツイタ無機ノ怒リヲ  
 熱病ニウメキナガラ  
 ギンギント鉄橋ヲ渡レバ  
 明日モシラヌコノ身ノ  
 ナント空々シイコトカ  
 額ノミガナント燃エルコトカ

街角ニヨロメケバ  
伸掛ルコンクリ  
矩形ノ壁ガゴロゴロト鳴ッテ  
盛りアガル瀝青ノ地面ニ  
オレノ充血シタ眼玉ガオチル  
—— 凄イ暴力ハナイカ ——  
踏ミ潰ス野犬ハイナイカ  
苦痛ニ刻マレタオレノ脳髓  
獣血ニ駆リタテラレテ  
沈ンダ街並ヲ吠エル  
オオ苛々ト深イ沈黙ノ底ニ  
狂人ノ激シイ笑イガ視エル  
オレハ引キ摺ルオレノ屍ヲ  
骸骨ガ舌ヲベロベロト流シ  
ハッハ  
ヤラレタ太腿ハ  
干涸ビタ関東ノネブカダ  
セマリクル何カ  
トテツモナイ巨大ナヤツガ  
オレノ背後デ  
ヒッソリト咳ヲスル  
暗イ顔ツキデシカモ

口笛ヲ吹クヤツダ  
ガリガリトオレヲ横切ル機械  
碎ケ散ル骨ヲ踏ミツケテ  
嘲笑イナガラ  
分厚イ外套ヲ引キ摺ッテ  
彼ヘト消エ去ル  
トギレトギレニ  
悲鳴ガ響イテ何事モナク  
墓場ノ如キ石塊ノ町ハ  
青白イ月ノ光ヲ  
硬直シタ顔面ニ映シテ  
不気味ナ鳴動ヲ続ケテイル

#### リベルテール合本

第1号から第24号まで。二十部位しかないの、もう  
し込みは至急に。あて先は、  
東京都練馬区大泉学園町2190 萩原晋太郎 気付  
定価二〇〇〇円（送料共）

## 二つの叛乱ークロンシュタットとウクライナ 1

三浦 精一

マルクスは「蜂起は芸術である」と言い、レーニンはこの線を繰返したということだ。マルクスにとってこの言葉は観念的なものに過ぎなかったが、バクーニンは全生命を打つて破壊の情熱に生きた。レーニンにとって蜂起は権力を握るための詐術だった。後にマフノを助けてウクライナで戦ったヴォーリンでさえ「私がレーニンの諸著作を、とくに一九一四年以後に書かれたものを讀んだとき、国家と権力の観念を除いて、彼の理念とアナキストたちの理念との間に完全な一致を認めた」といつており、アナルコ・ポリシェヴィズムという言葉さえもできた。ポリシェヴィキとアナキストのスローガンはほとんど同じで区別できない位だった。亡命先から続々と帰って来たアナキストたちも出獄した同志たちと共にこの方向で活動したのだった。レーニンには無政府主義的と言われる「国家と革命」の以前に「われら何をなすべきか」という前衛主義の著作があり、自然発生的な民衆の運動に対して寛大な態度をとることに、それが自己の権力把握に、大衆の要求という名目で利用できるといった限界と打算を持っている。民衆が動いてい

ない時には、この民衆に不満を意識させて要求を激発させることが前衛の任務でもあり、マルクス・レーニン主義者が扇動を行なう意図もここにある。前衛の活動は一つの手段である。赤軍派などの行動もこうした前衛主義であろう。こうした手段の裏にある大目的は権力把握、権力による政治、政治による愚民指導で社会主義社会の実現である。こうした限界を知らなかった訳でもないだろうが、ポリシェヴィキに操られて動く民衆とともに、アナキストたちも叛逆に夢中になっていた。瞬間的な反逆の行動の中に明日の無い美を追求していたと言えよう。明日を考えると美が美でなくなることもあるだろう、しかし個は今日死んでも、人類は明日も生きるのだ。アナキズムは今日も明日も人類とともに生きるのだ。ベルクマンも、ゴールドマンも、ヴォーリンも、二月革命から十月革命まで、そしてクロンシュタットの叛乱が起る前まで、こうした共闘を続けていた。しかし誰が彼等責めることができようか。皆が大きな民衆の波の中にもまれていたのだ。民衆の一人となって生きていたのだ。民衆の意志を実現するために働いていたのだ。傍観者

や後世はいろいろな言えもする。

アナーキストたちがこうした活動を続けている間、別の軌跡をもったレーニンやトロツキーは軍事革命委員会をつくり、ペトログラードの軍管区司令部と各部隊とのパイプを切って赤衛軍を組織することを画策していた。

彼等は民衆の叛乱だけでは革命は成功しないこと、ピラミッド型の命令系統の軍隊を持たねば厄介な民衆を鎮圧することも、権力の安定も不可能という権力主義者の考え方で、着々とそれを実行した。蜂起したのが一九一七年十月二十五日で、ペトログラードを包囲したが兵力が不足で、先の見通しもつかないでいたところにクロンシュタットから二千人の水兵が駆けつけて、包囲は完了し、蜂起が成功したのだった。

この日全ロシア・ソヴィエト大会を開いた。代表者六四八名中ポリシェヴィキ支持者の数は三三八名で、この中には社会革命党（エスエル）やアナーキストも入っている。ポリシェヴィキは半数以下であっても、軍隊と権力は手に入れた。後は政治、そして弾圧だ。

#### クロンシュタットの叛乱

アナーキストとポリシェヴィキ共通のスローガン「土

が演説したように、労働者がいかに国家を支配するか知らないということも、権力を握った権力者の意志通りに実行するというのも同じだ。そして権力者の意志を実行するためにピラミッド型の支配機構をつくって官僚支配を行なうことも共通である。差はマルクス主義の実践を政策とすることだけである。この目標と政策のために、昔ながらの支配と服従の機構はそのままにしているのである。この支配と服従の機構を否定するのがアナーキストである。労働者が国家支配の方法を知らないように、悔悟した貴族バクーニン、クロボトキン、トルストイが否定するように、国家のこうした支配機構を否定するのだ。一九一八年二月に検閲法が出て言論が封じられ、警察と軍隊によって全アナーキストの組織は潰滅させられ、エス・エル派にも手が伸びて、その指導者だったマリヤ・スピリドノヴァは投獄され、銃殺された。アナーキストもエス・エルも地下にもぐったが、巨大な国家警察の前で、どれほどの活動ができるだろうか。迫害の手はトルストイ主義者にも伸びた。邪魔者は殺すのだ。こうした中で一九二一年二月八日、クロボトキンはモスクワ郊外のドミトロフの村で死んだ。三年の間その白鳥の歌「倫理学」の第一巻を書きながら、文明世界から隔離されたまま淋しく死んで行った。クロボトキンは帰国し

地を農民に、工場を労働者に」は全国的に喜ばれて、農民も労働者も、土地を分配したり、工場を管理したりしていた。だが権力者にとっては土地も人民も工場も国家のものだ。このようなアナーキストやアナルコ・サンジカリストの主張や行動は黙認できない。今のロシアでは原始蓄積もいたって貧弱な初期資本主義の段階である。これをどうするか、共産主義国として原始蓄積、工業化、農業集団化を強行しなければならない。資本主義国に追いつき、追い越さねばならない。経済の発展段階についてのマルクス主義の真实性を民衆に教えねばならない。これによって社会主義段階に踏みこまねばならない。しかるにどうだ。民衆はアナーキストの叛逆ムードで動いているだけではないか。権力を獲得するためにはこうしたムードも必要だった。だが今はちがう。こうしてレーニンは一九二一年一月、全ロシア鉱山労働者の第二回大会で、「はたして労働者各人がいかに国家を支配するかを知っているだろうか、実際の人間なら、それがおとぎ話であることをわきまえているのだ」と演説している。

革命と国家の政治は別ものだ。このことは昔から知られていることで、民心の安定を名目として兵を起し、あらゆる勢力を利用して権力を握るという点ではレーニンの手段も、シナの易姓革命も別に変りはない。レーニンが

た時対ドイツ戦争の継続を主張したため、ほとんどのアナーキストから離反されていたのだった。クロボトキンを尊敬していたレーニンは入獄中のアナーキストたちを釈放したので、この人々が葬送への先頭に立ち、赤軍兵士も水兵も武器を持たずに、一般市民たちと共に参加し「権力あるところに自由なし」と大書した旗は黒旗とともに風にはためき、大デモンストレーションとなって、ノーヴォ・デヴィツチ修道院へ五マイルの道を行進した。ソヴィエツト政権に対する民衆の不満の最後のデモ行進だった。これこそ少しでもゆるめたら爆発しかねない民衆の姿だった。

クロボトキンが死んで一月とたたない内にクロンシュタットの叛乱が起った。ペトログラードの包囲を成功させて、ポリシェヴィキを勝利させた水兵たちが叛乱したのだ。革命を成功させるために駆けつける水兵たち、その水兵たちはすでに旧海軍のヒエラルキーの構造に叛逆していた。アナルコ・ボルシェヴィズムがここにも影響をおよぼしていたのである。すでに階層的指令制は廃止され、水兵の委員会が出来て自分たちのリーダーを選出していた。地方工場で企業ごとに労働者管理が行われていたのと平行して、ここにも非中央集権化が実施されていた。今までの階級的官位は無くなって士官も兵士も同

じ同志愛に結ばれていた。これが軍紀である。最後まで戦い抜いたクロンシュタットの水兵の強さはここにあった。これは自由人の強さで、ヒエラルキーにおける奴隸の強さとは根本的にちがうものだ。したがってトロツキーによって考案された兵制もここでは大きな抵抗に出会わねばならなかった。

白色テロがおさまって水兵たちが農村に帰休したとき彼等は穀物強制徴集の実状を見た。町にも村にも貧困と不安が満ち満ちていた。父も兄も権力に打ちひしがれていた。叛乱の重要人物だったベトリチェンコは「政府はこれをおれたちにかくしていたんだ」と叫んだ。

おまけに物資や食料が欠乏して来た。壊血病も流行し出した。水兵たちの代表がモスクワに陳情に行ったら抑留されてしまった。ラスコリニコフ司令官は、代表を釈放しなければ艦砲はベトログラードに向けられるだろうと言っている。

一九二〇年末にはヒエラルキーの兵制に反対する「艦隊反対派」が出来て、五千人からの共産党脱党者がでる仕末だった。トロツキーとジノヴィエフの暗闘もあり、党の官僚支配も攻撃され、艦隊の党支部廃止も要求された。こうした中でベトログラードのストライキの報が伝わりと労働者階級への連帯の叫びがあがり、ワシリー島

でデモ参加者が警察で銃殺されたなどの流言も伝った。

一九二一年二月二十六日にはベトロバヴロフスク艦とセバストポリ艦の水兵は緊急集会を開いて事実を確めるために代表をベトログラードに送った。着いて見ると工場は軍隊に包囲され、作業中の職場には共産党員がいて監視の眼を光らせていた。水兵たちが近ずいても労働者たちは沈黙していた。ベトリチェンコは「これは工場ではなくて、ツァー時代の強制労働監獄だ」と書いている。

二月二十八日、代表が帰って来てベトロバヴロフスク艦上で実状を報告すると、これが歴史的な集会となってクロンシュタット叛乱の憲章ともなる決議が行われた。全文を訳してみよう。

▲艦の乗組員総会によってベトログラードの情勢を調査するために派遣された代表者たちの報告を聞き、われわれは決議する。

1. 現在のソヴィエトが労働者や農民の意志を表明していないという事実によって、ただちに、労働者および農民に対する事前宣伝を行なう自由をもった秘密投票による新しい選挙をおこなうこと。
2. 労働者と農民に対し、アナキストと左翼社会主義政党に対し言論と出版の自由をあたえること。
3. 労働組合と農民団体に対する集会の自由を確保す

ること。

4. 一九二一年三月十日までに、労働者、赤軍兵士、ベトログラード・クロンシュタットおよびベトログラード地方の水兵の無党派会議を召集すること。

5. 社会主義諸派のすべての政治的入獄者ならびに労働者農民運動に関連して投獄されたすべての労働者、農民および水兵を釈放すること。

6. これらの入獄者ならびに強制収容所に入れられた人々の事件を審理するために委員会を選出すること。

7. すべての政治部局を廃止すること、いかなる党もその思想宣伝に特権をあたえられず、こうした目的のために国家の財政的支持を受けてはならないからである。その代り、地方的に選出されて、国家によって財政的支援を受ける文化的、教育的委員会を設立すべきである。

8. 即刻、すべての検問所を撤回すること。

9. すべての働く人々の食料配給を平等にすること。ただし健康に有害な職業に従事する人々は例外とする。

10. 軍隊内の共産主義戦闘団ならびに工場および製造所内で服務する共産主義者監視員を廃止すること。こうした監視員や団員の必要性が起つたら、軍隊では兵士の中から、工場や製造所では労働者の考えにしたがって任命されるべきである。

11. 農民に土地に関する行動の自由を完全に与えること。また農民が自分たち自身の手で、すなわち雇用労働によらずに運営できることを条件として、家畜保有の権利をあたえること。

12. 軍のすべての支隊ならびに士官候補の同志たちにわれわれの決議を裏書きするように請求すること。

13. 新聞がわれわれの決議を広く伝えるように要求すること。

14. 巡航管理局を任命すること。

15. 自分自身の労働による自由な手工芸生産を許可すること。

艦隊会議議長 ベトリチェンコ  
書記 ペレベルキン

ベトロバヴロフスクの決議はバルチック艦隊だけでなく町にも村にもロシア全土に伝って、皆の不満は相呼応するにいった。この十五ヶ条をよく読むがよい、誰がこれを無政府主義的だと言えるだろうか。第一条はたしかに政府にとっては痛いだろうが、ソヴィエトに対する不信任で改選の要望に過ぎない。2も3も常識的だし、4、5、6は7と共に不公平な官僚政治への抗議であり共産党に対する不信と公平の要求で一党の独裁をついたものだ。8と10は警察政治や軍政に対するもの、9と11



は働らく者の当然の要求ではないか。基底は政府の失政を改めよというにある。こんなことは日本でもアメリカでもイギリスその他どこでも、野党が常に主張していることだ。しかし一度手に入れたら、守銭奴が金にしがみつこうように、権力を放すまいとするのが、権力者の常である。放したら元も子も無くなるのが独裁政治、専政政治である。そして官僚も地位があぶない。無政府主義的でない改選の要求でも胸に刃物を突きつけられたも同然だ。三月一日、約一万五千人が集ったアンカー広場の大会にはカリニンやクズミンも出席した。はじめはなごやかに始められた大会もベトログラードのスト弾圧などのことから噴激した一同は暖衣飽食とカリニンを攻撃しはじめた演説は野次られて聞こえず、クズミンの弁解も火に油をそそぐような仕末になった。三月二日のクロンシュタット・ソヴィエト改選のときもクズミンは態度をかえず、官憲をかさにきた恐喝的態度に出た。パークマンは、党に反対したのでなく官僚主義を攻撃しているのにクズミンの演説は火薬の中に火を投げこんだと言っている。叛乱は始まり、革命臨時委員会が任命された。

自然発生的な叛乱だった。もし計画的に叛乱するとしてたら、凍結で軍艦が動けない時に起しはしない。もう一ヶ月位解氷を待てば有利に展開できるのだ。トロツキー

もトハチエフスキー將軍も一気に鎮圧に移った。自然発生的な叛乱の中で発行される新聞は日毎にアナキスト色を濃くして行った。三月七日トハチエフスキーは攻撃の火蓋を切り、十日にわたる修羅場が展開された。十七日の朝、最後の機関銃の音も止み、生き残ったものたちは射殺されたり、流刑になった。

民衆の要求をかがげ、官僚に追いつめられて叛乱し、アナキストとして戦かい、トロツキーやトハチエフスキーに虐殺された叛乱。水兵たちの中にはアナキストもいたが、その中で重要な役割をはたしたベトリチェンコはマフノと同じウクライナの出身だが、アナキストではなかった。しかし皆がアナキストとして戦ったと言われる。完敗、そして死は確実だった。こうした中で純粹になった個が心の底から把握できる思想、個と個が死を前にして相容る思想、それは権力の思想ではない。

トロツキーは後に亡命し、メキシコで暗殺された。トハチエフスキーはゾノヴィエフ等とともに粛清された。ロシア革命の輝かしい星と呼ばれて権勢をふるった人々の中で普通に死ねたのは、レーニンは別としてカリニンだけだったようだ。権力主義者同志が「同志」と呼び合えるのは鉄火の下をくぐる時、利権を目ざす過程（自民党の派閥のような金蔓による離合）そして奴隸的服従によって官僚になった時のようだ。

## 「アナキズムと二つの雲」への反論

西塔 昌弘

リベルテールの一月号にのった大塚君に言わせると、アナキズムをおおっている二つの雲とは、OSLとタナトスを想定して書いたということだった。そこで、タナトスの立場から少し反論を試みたい。

文面から前の方がOSLで、後がタナトスということらしいが、タナトスに関して大塚君は「クロボトキンが貪欲に近代科学にせまった精神を忘れ」と言っているけれど、タナトスの立場から言えば、クロボトキンの精神を忘れているのではなく、否定しているのだということ言いたい。それは、少し象徴的に言うと、今までのアナキズムの大勢はどちらかというと、社会的アナキズムであったのだが、それでは、革名はありえたととしても、反逆はできないのではないか、という疑問からなのだ。

この革命と反逆の分離ということはシュティルナーによって与えられたと思うのだが、そのことから感じられるように、反逆とは結局、個人的アナキズムの立場からしかなされないのではないだろうか。にもかかわらず、何故タナトスはクロボトキンを評価するのか。この逆説、あるいは矛盾は、おそらく社会的アナキストには生じな

いし、分りもしないだろう。だから、クロボトキンはあれほどあつさりシュティルナーを否定することができたのだ。持論、大塚君がそのようにタナトスを理解したというのには、タナトスの方にも欠点があったということであり、今まで、個人主義的アナキズムの主張とクロボトキンの評価は別々になされていて、その間の関係を明確にしていなかったということ、反省する必要がある。にもかかわらず、大塚君自身にもその逆説が存在しないのは事実であり、だから、彼の指摘はたえず甘いものとなる。ではタナトスが何故そのような矛盾、逆説を持たざるをえないかということになるが、ここでは、反逆とはシュティルナーも感じたように、簡単なものではないということ、タナトスでも感じたからだ、というようにところで逃げさせてもらって、次に大塚君が指摘するいくつかの点に関して反論させてもらう。

大塚君がタナトスの落ちこみである矛盾の意味が分っていないということは、まず彼の資本主義理解からも分る。「資本主義の遅れた側面は、道徳とか宗教とかで補足されているけれども、それさえもいつか一掃されるだろう」と大塚君は思っているらしいのだが、宗教と融合しようとするのではなく、それを一掃しようとする、それこそ資本主義の最大の弱点なのだ。資本主義は宗教

を一掃できないだろうし、それは資本主義それ自体が一種の宗教だということによってそうなのであり、資本主義はそこで自己の限界と挫折につきあたらざるをえないのだ。それはまた、いくら資本主義が人間を人間工学的人間にしようとしても、人間はたえず資本主義の人間からはみ出したものであるだろうということでもある。そしてそこから、宗教や人間からの反撃もまた開始される。現在のには、その反撃はニヒリズムとして、いわゆる既成宗教をも超えた所でなされているし、それはさらに、アナキズムとしてニヒリズムをも超えた所で資本主義を浸蝕していくだろう。

さらに大塚君は「アナキズムの理論は、個人の自由を追求する理論だが、常にコミュニケートを媒介とした革命の理論である」と言うとき、そこにも彼のアナキズム理解の甘さが現われている。すなわち、そう言ってしまえば、アナキズムとは本質的に他人との関係を拒絶するものではないだろうか、という問題意識も生じないだろうし、それから、にもかかわらず他人に語りかける自分との間の矛盾をも、自己のものとすることもできないだろう。逆に言えば、大塚君はそのような矛盾を認めないところから出発しているように思える。ではこの矛盾を認めないということはどういうことなのだろうか。それ

は、実存から生じる矛盾を認めまいとすることに他ならない。そして、それは理性的論理を実存にまであてはめようとすることであり、それこそ近代理性主義の精神であって、それはまた資本主義の思想でもある。大塚君がこの矛盾を認めないということは、彼が資本主義の論理に乗っかっているということではないのか。たたいえることは、このような実存より生じる、存在と言葉の間の矛盾は、「言語学、心理学、一切の科学による認識論的歯止め」では、何の役にも立ちはしないだろう。アナキストが他者に語りかけるとき、それは言葉によって語りかけているのではなく、語りかけることのもつ矛盾において語りかけているのだ。すなわち、その行動は実存にとっても矛盾であると同時に、関係にとっても矛盾ではないのか。もしそうなら、それはもはや関係に収束するとは言えないだろう。

大塚君は、「二つの雲は、おそらく現代資本主義とそこに組みこまれて自己との関係、自己の存在様式を認識できないために発生したものであろう」と言うけれど、タナトス的立場から言わせれば、大塚君こそそうなのだ。だから、大塚君のアナキズムの新展開なるものも結局は資本主義へ反逆するアナキズムではなく、その延長線上にあるアナキズムしかもたらさないだろう。

## たそがれ日記

山鹿泰治

黒色青年連盟と自連

大正十五年一月三十日、芝の協定会館で第一回黒連演説会をやった。黒連には自連加盟の各労組の有志を中心として、思想団体からは自我人社、労運社、無軌道社、黒旗社、黒旋風社、朔風会、黒流社、黒色運動社、農村労働同盟、野蠻人社、解放戦線社、文芸批評社、無差別社、自然児社、自由労働運動社、江東自由労組、関東労組連合会、東京印刷工組合、横浜印刷工組合、新潟労働同盟、逓友同志会、市電自治会、芝浦労働組合、大連黒社、中部黒連、東北黒連、北海道黒連、等。団体として入りにくい者は有志として入った。

この発表の日の夕方、散会した流れが銀座へくりこみ、黒旗の先でウィンドウガラスを破り、「革命だ、革命だ」と連呼しつつ数十軒の店をこわした。旗を持っていた十数名が検束された。

ついで昭和二年七月のサッコとヴァンゼツチ釈放要求が全世界に広がり、東京でも築地小劇場で黒連の主催で演説会をやった。私もその演壇に立った。いつもの臨検とはいく分手心があつたので皆よく話した。私はその直

後上海の労働大学から招かれて世界語教師に就任した。

サッコとヴァンゼツチはともにイタリアのアナーキストで、強盗の嫌疑で捕えられ、死刑を求刑されていた。マサチュセツ州の裁判所は、かれらのアリバイを認めなかった。イタリアの移民だったのでローマ法王まで助命運動にサインしたのに、アメリカ資本家帝国主義政府は兩人がアナーキストの労働者であるというだけの理由で無理矢理に死刑にしまった。これが日、独、伊の三国同盟を促進して世界が反動期に入ることになった。

水沼辰男と立田泰その他

この二人は信友会を育てあげ、自連結成に多大の努力をした。水沼さんがメーデーの初めに一人でつくしたことは有名だ。かれが大杉と接触して東京印刷工労組を革命的労組に仕上げたのは、日本の労働運動史上の花だ。立田はまだ若かったのに早く死んで残念だった。

水沼さん兄弟は、兄辰夫が芝浦労働にいたし、弟の熊さんはロシアに行ってモスコウ大学に入ったことがある。下の浩さんはアナーキスト連盟の書記になったが、病気で台湾から帰ってからはあまり活動できなかった。

辰ちゃん「両手の辰」と言われ、欧文のハンドセツト（手組み）では日本一の腕前だった。シャパン・アド

バイザーその他の社で、いつも争議には先頭に立って資本家をなやませた。労働運動社の同人であり、黒連の知恵者だった。各機関紙に執筆して、いつもサンジカリストの主張を堅持した。全国労働総連合のための大阪大会で「水沼案」として自由連合主義を強く主張して、総同盟その他の中央集権主義を強く排撃したことは、日本の労働運動史上のもっとも貴重なピラミッドとなった。かれは一生まじめな印刷工の模範としてつくした。技術上でもかれの「欧文植字工場必携シリーズ」A6は印刷学会が出版した。この一冊は昔渡辺八太郎の出した「活版術捷徑」以来の貴重文献であった。

長年の労働と仲間の激励に疲れを知らぬかれは、あくまで生一本の職人で老後も職場をはなれなかった。労働者の権利を主張した彼は、半面自分の職業にも忠実で、「両手の辰ちゃん」の名にふさわしかった。諏訪梨郎とあだ名されて、あごの長いかれは明晰な文体で自由連合主義を主張し通した。

芝浦労組の佐藤陽一君も常にアナキストとして、手のとどく限り運動にブラスした。

綿引邦農夫君は正進会の文撰工で「雀毛」とあだ名されて、若い頃から老成円熟の風があり、よく仲間のせわに年中多忙多忙とくり返して疲れなかった。

高橋光吉君は自連運動でスパイに追跡され、上海に亡命したが同志トームセンらと協力してフランス租界でクリスマスに教会堂の前でキリスト教排撃のピラをまいて大兵肥満のフランス人に捕えられて、日本領事館から送還された。

芝浦の製罐工谷田部君はストの時、あばれてスパイにねらわれたので中国へ亡命した。かれはエス語もできたが中国の婦人と結婚して、武良二君が上海にいた頃、妻の弟のいたジャワに渡り「楊世民（ヤンシーミン）」になっていた。戦後まで居所がわかってはいたが、その後不明である。かれは器用な男で福建省のいなかで、錆びついていた製糖工場を一人で修繕して運転させ、農民に売られていた。

### 原稿募集

自分の今考えていること、反論、批判、質問、批評、提案、自分たちのグループの自己紹介、運動の報告、そのほか何でもいんです。一行二十五字で、なるべくベージにおさまるように。ただし、権力主義者やそのシンバからの自己宣伝のための投稿は、お断わりしたいのです。表紙用の絵も、送って下さい。

## 書き洩らされた アナキズム運動史

横倉 辰次

その夜上田光慶たち黒連の連中は自宅に戻り、AO労働者連盟の者たちは、それぞれ昔馴染のドヤ（富川町、高橋、涙橋などの木賃宿）で一泊した。翌日は期せずして全員が事務所集って復讐戦を協議し、また再度の襲撃に対しての応戦準備を議した。

今度はつるはしの柄はないので、武器についての相談は、「どうだい、一そ、百姓一撥みたいに竹槍をつくらうじゃないか」ということになり、青竹を買って来て削りはじめた。茨城県生れで炭坑育ちの斉藤敏資が、「竹槍は削っただけでは駄目だ。油を塗って焼いて磨くと真物の槍と同様になり、本当の百一撥の竹槍はそうしてつくるんだよ」と言い、彼の指導にしたがって真物の竹槍を製造した。後日この竹槍は鳥居坂署のガサがあった際に全部押収されてしまった。デカ共は、「たまげたものだ。本当に竹槍をつくりおって」と驚嘆した。今日ならばさしづめ凶器準備で問題になるのだが、当時はドロバ（泥棒などの係）と高等とが分れていて対立していた。何となくムニャムニャに起訴されずじまいで済んでしま

った。竹槍製造主犯も求明されず斉藤敏資も逮捕されずののがれてしまった。（いつか四谷の古河三樹君の店で当時江東自由労働者組合員で魚藍坂の乱闘に参加した詩人大沼亘を紹介された。四十年ぶりなので大沼亘はなつかしように、「横倉さんはあの頃黒色白自組合にいたんですってねえ」と老眼をうるませていた）。

この乱闘を契機に黒色自由労働者組合の加入者が増加した。戦いには敗れたが、十人で百人を相手にしたというのが判官びいきの日本人には人気をおったのかも知れない。

だが、組合とはいいながら黒色自由労働者組合は今日の組合は拡張しながらも拡充せず、単に粗暴な挑発行為に走って、その名の如く自由労働者であって、職場の市の雇員に迷惑をかけるのみであった。それでついに当局から監視、弾圧されて、今日に見る登録労働者という形体がでる端緒になってしまったのだ。

ここで言いたいのはAO労働者出身者は一応アナルコサンジカリズムを認め、組合（組織）の必要性を認めていたが、黒連の連中は純正アナキストを標ぼうして、アナルコ・サンジカリズムの否定者だった。当時の言葉でいうと左翼小児病的で、やたらに現場で反抗したり、



- Peter Kropotkin: *Memoirs of a Revolutionary* (1899). Introduction and notes by Nicholas Walter. New York, 1971.\*
- Peter Kropotkin: *Mutual Aid* (1915). Edited by Ashley Montagu. Boston, Mass., 1955; Boston, Mass., 1969.\*
- P. A. Kropotkin: *Selected Writings on Anarchism and Revolution*. Edited by Martin A. Miller. Cambridge, Mass., 1970.\*
- Peter Kropotkin: *The State: Its Historic Role* (1898). Translated and edited by V. Richards. London, 1969.†
- Priscilla Long (Editor): *The New Left*. Boston, Mass., 1969.\*
- Errico Malatesta: *Anarchy* (1892). London, 1964.†
- G. P. Maximoff (Editor): *The Political Philosophy of Bakunin*. Glencoe, 1953.\*
- Max Nettlau: *Bibliographie de l'anarchie* (1897). New York, 1968.
- Henry Pelling (Editor): *The Challenge of Socialism*. London, 1954.
- Pierre-Joseph Proudhon: *What is Property?* (1885). Translated by Benjamin R. Tucker. Introduction by George Woodcock. New York, 1970.\*
- V. Richards (Editor): *Errico Malatesta: His Life and Ideas*. London, 1965.\*

- Emma Goldman: *Anarchism and Other Essays* (1911). Introduction by Richard Drinnon. New York, 1969.\*
- Emma Goldman: *Living My Life* (1931). 2 volumes. New York, 1970.\*
- Emma Goldman: *My Disillusionment in Russia* (1925). New York, 1965.\*
- Thomas Hodgskin: *Labour Defended Against the Claims of Capital* (1825). Introduction by G. D. H. Cole. London, 1964.\*
- Robert Hoffman (Editor): *Anarchism*. New York, 1970.\*
- Irving Louis Horowitz (Editor): *The Anarchists*. New York, 1964.\*
- Wilhelm von Humboldt: *The Limits of State Action*. Edited by J. W. Burrow. Cambridge, 1969.
- Peter Kropotkin: *Memoirs of a Revolutionary* (1899). Abridged and edited by J. Allen Rogers. Garden City, NY, 1962\*; Gloucester, Mass., 1967.
- Peter Kropotkin: *Memoirs of a Revolutionary* (1899). Foreword by Barnett Newman, introduction by Paul Goodman. New York, 1968; New York, 1970.\*

- Massimo Salvadori (Editor): *Modern Socialism*. New York, 1968.\*
- Henry J. Silverman (Editor): *American Radical Thought*. Lexington, Mass., 1970.\*
- Lysander Spooner: *No Treason: The Constitution of No Authority* (1870) and *A Letter to Thomas F. Bayard* (1882). Edited by James J. Martin. Larkspur, Col., 1966.\*
- Max Stirner: *The Ego and His Own* (1907). Translated by Steven T. Byington. Edited by James J. Martin. New York, 1963.\*
- Max Stirner: *The Ego and His Own* (1907). Translated by Steven T. Byington. Abridged and edited by John Carroll. London, 1971.\*
- Max Stirner: *The False Principle of Our Education*. Translated by Robert H. Beebe. Edited by James J. Martin. Colorado Springs, 1967.†
- Lawrence Veysey (Editor): *Law and Resistance*. New York, 1970.\*
- Voline: *Nineteen-Seventeen and The Unknown Revolution*. Translated by Holley Cantine. 2 Volumes. London, 1954-1955.

## アナキズム文献紹介

フリーダム社扱いの文献です。直接  
同社へ申込むか、リベルテール社を  
通すと入手できます。価格・郵送料  
は照会すれば判ります。なお例示に  
(1961)とあるのはリプリント  
版、木印ペーパーバック、ヤ印パンフ  
の由。フリーダムブックスの住所は  
下記の通り、郵便では、このあとに  
England と入れること。

FREEDOM BOOKS,  
84b Whitechapel High Street, E.1

タナトス 四号 タナトス社理論誌 三〇〇円  
▽「国家と革命」ノート(1)▽シニエールナ研究  
(上)▽アナキズム芸術論断片▽無政府主義の戯画(上)▽三里塚の炎▽その他  
神もなく主人もなく  
四号 タナトス社情報紙 三〇円

サボタージュをして挑発した(もともと働こうにも土方  
仕事は彼等には不向きであり、不可能でもあった)。黒  
色自由労働者組合なるものがあつたために、彼等も仕事  
が得られ、毎日の出面(でずら、賃金)が得られたのに、  
それを忘れて組合を否定し、無視したのだ。これでは組  
合としての発展も拡充もなかったわけだ。  
こんな状況で、住所も氏名も確認せず雇用するという  
実に自由な状態だった自由労働者を、前に言ったように  
監督官庁の職安としては不利不便を痛感したのだろう、  
登録制という規則でしるることになった。これに対して  
黒色自由労働者組合は先頭に立って反対した。だが職安  
は登録しない者は職(日雇)の紹介が不可能になると宣  
言した。

## PUBLICATIONS MENTIONED

(Expensive facsimile reprints have been omitted. Dates in brackets are of the editions reprinted. Editions marked with an asterisk are available in paperback, and those marked with an obelisk are pamphlets.)

- Alexander Berkman: *The ABC of Anarchism* (1942). Introduction by Peter Newell. London, 1971.†
- Alexander Berkman: *Prison Memoirs of an Anarchist* (1912). Introduction by Paul Goodman. New York, 1970.\*
- Alexander Berkman: *Prison Memoirs of an Anarchist* (1912). Introduction by Kenneth Rexroth. Pittsburgh, 1970.\*
- Stewart Edwards (Editor): *Selected Writings of Pierre-Joseph Proudhon*. Garden City, NY, 1969.\*
- Paul Eltzbacher: *Anarchism* (1908). Translated by Steven T. Byington. Edited by James J. Martin. New York, 1960.
- Philip S. Foner (Editor): *The Autobiographies of the Haymarket Martyrs*. New York, 1969.
- Albert Fried and Ronald Sanders (Editors): *Socialist Thought*. Garden City, NY, 1964.\*
- Frederick C. Giffin and Ronald D. Smith (Editors): *Against the Grain*. New York, 1971.\*
- William Godwin: *Enquiry Concerning Political Justice* (1798). Abridged and edited by K. Codell Carter. Oxford,

- E. Armand: *Anarchism and Individualism*. Edited by S. E. Parker. Bristol, 1962.†
- Michael Bakunin: *God and the State* (1916). Introduction by Paul Avrich. New York, 1970.\*
- Michael Bakunin: *Marxism, Freedom and the State*. Edited by K. J. Kenafick. London, 1950.\*
- Michael Bakunin: *The Paris Commune and the Idea of the State*. Translated by Geoff Charlton. Edited by Nicolas Walter. London, 1971.†
- Roger N. Baldwin (Editor): *Kropotkin's Revolutionary Pamphlets* (1927). New introduction by Roger N. Baldwin. New York, 1970.\*
- George Barrett: *The First Person*. Edited by S. E. Parker. London, 1963.†
- Jonathan Beecher and Richard Bienvenu (Editors): *The Utopian Vision of Charles Fourier*. Boston, Mass., 1971.